

様式 1

東北大学大学院情報科学研究科 「 シンポジウム支援経費 」 報告	
タイトル	QOL の向上をめざしてー健康、病気及び福祉
主催者	東北大学大学院情報科学研究科 健康情報学講座
期日	平成 1 5 年 9 月 2 6 日 (金) 午後 1 時 2 0 分より午後 6 時
会場	東北大学大学院情報科学研究科棟大講義室
出席者数 (講師・パネリスト等を除く)	8 3 名
講師・パネリスト等の氏名・勤務先等	辻 一郎 (医学系研究科公衆衛生学分野教授大学) 中尾光之 (情報科学研究科バイオモデリング論分野教授) 飛田 涉 (情報科学研究科健康情報学講座教授) 猪岡 光 (情報科学研究科知能制御システム学分野教授) 中野栄二 (情報科学研究科人間—ロボット情報学分野教授) Santos TR (情報科学研究科病態生理情報学講座 院生)
目的	2 1 世紀には情報技術の医学領域へ応用は益々不可欠な問題である。しかも人間が生活する上で大切なことは個々人にあった質の良い生活スタイルを確立することである。 本シンポジウムでは健康であることの意義、健康を害したときの問題、そして質の良い生活スタイルを得るための戦略について情報科学の立場から話題提供することを目的とした。 本シンポジウムは市民公開講座として開催された。
内容	辻 一郎教授は「健康寿命の延伸に向けた学際プロジェクト」のタイトルで健康寿命の概念を提唱し、健康寿命を延ばすための戦略を仙台市の住民健診を例に挙げ、進行中のプロジェクトの概要と将来展望を述べた 中尾光之教授は「睡眠—覚醒リズムとの付き合い方」のタイトルで健康的な生活を送るためには規則正しい睡眠と覚醒のリズムをとることの重要性を述べた。

内容	飛田 渉教授は「喫煙習慣と呼吸器障害をめぐって」というタイトルで本学学生の喫煙習慣の現状、仙台市内の某健診センターとの共同研究における喫煙習慣と COPD との関連、喫煙習慣継続時の肺疾患について述べた。 TR Santos は「Brain imaging and respiratory overloads」というタイトルで呼吸器疾患の第一の臨床症状である呼吸困難(息切れ)時の脳の活動について、18F-FDG を用いた PET による画像によって提示した。 猪岡 光教授は「患者に優しい救急搬送を目指して」というタイトルで救急車搬送中の機械的振動が患者さんに悪影響を及ぼすことを示し、救急車の機械的振動を軽減させる方法を開発し、その効果を述べた。 中野栄二教授は「ロボットの福祉への応用」と言うタイトルで福祉介護の場における日常生活支援サービスロボット開発について現状と将来展望を述べた。 回終了後のアンケート結果を付記する。 参加者から次のようなご意見、コメントを頂きました。 1．市民講座を情報科学研究科で開催したことに対して： 交通の便の良い場所で開催されればもっと多くに市民が参加できたかも知れない。 しかし大学のキャンパスで開催されたことはむしろ大学を知る機会となり、意義があると思われた。 2．シンポジウムの内容に関して ○情報科学研究科の立場から医学、医療や福祉にどのようなアプローチがなされるのか興味を持って聞いていた。 ロボットが医療へ介入できる可能性を知り感銘を受けた。 ○今回のシンポジウムから学際的な研究の重要性を知った。 ○喫煙の及ぼす健康障害について興味を持って聞いた。 自分は以前ヘビースモーカーであったが禁煙に成功した。 その為には多大な努力を要した。 ○救急車に於ける機械的振動を如何に少なくするかなど 情報科学における基礎的な研究が救急車の開発に役だっていることを知り大変感銘を受けた。
-----------	--

	○ 大学院生の研究がこのような市民公開シンポジウムで発表されたことは新鮮な感じがした。 1) 講演時間について ○ 妥当な時間配分と思われた。 2) ポスター・抄録集について ○ プロフィールもあり講演者をすることができた。 ○ 抄録の長さも妥当と思われた。 ○ 一般市民が迷わぬようポスターに地図やバス停の記載をして欲しかった（抄録集には地図が掲載されていたが）。 以上のような貴重なご意見を頂きました。
情報科学研究科にとっての意義・貢献度	本シンポジウムは健康情報学が軸となって企画されたシンポジウムで、健康と福祉に関して、情報科学研究科の各講座の先生方がそれぞれの立場から述べられ、しかも市民に公開されてのシンポジウムの意義は大きい。 シンポジウム後のアンケートからも反響が大きかったことから貢献度は極めて高かったと企画した一人として自負している。 情報科学研究科から人間の幸福と平和につながるような研究が発信されるよう祈りたい。